



TITLE:

米國文化社會學(下)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

---

CITATION:

米田, 庄太郎. 米國文化社會學(下). 經濟論叢 1930, 31(4): 485-520

ISSUE DATE:

1930-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129942>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十二卷 第四號

昭和五年十月一日發行

## 論 叢

戶數割に於ける矛盾・・・・・・・・・・法學博士 神戶 正雄  
米國文化社會學・・・・・・・・・・文學博士 米田庄太郎

## 說 苑

世界商品價格の決定・・・・・・・・・・經濟學博士 作田 莊一  
歸屬理論の一考察・・・・・・・・・・經濟學士 柴 田 敬  
獨逸舊稅制の崩壞と財政調整法・・・・・・・・經濟學士 中川與之助  
德川時代の藩營專賣論・・・・・・・・・・經濟學士 堀江 保藏

## 雜 錄

戶數割に於ける資産狀況に依る資力算定方法・・・・・・・・經濟學士 安田 元七  
信用及信用組織・・・・・・・・・・經濟學士 中 谷 實  
經濟學全集「統計學」を讀む・・・・・・・・經濟學士 蜷 川 虎三

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

# 米國文化社會學 (下)

米田 庄太郎

- (一)緒論
- (二)米國文化社會學の由來
- (三)米國文化社會學の基本概念及び原理(以上前號掲載)
- (四)米國文化社會學論爭
- (五)米國文化社會學批判

## 四 米國文化社會學論爭

前々節に於て述べしが如き理由或は事情に基いて生まれ出で、前節に述べしが如き基本概念及び原理を立てる文化的接近の方針、或は文化社會學の方針が、近來米國の社會學界に於て勃興し來るに當つて、在來の諸方針を遵奉する同國社會學者が之れに對してとれる態度は、大體上三種に別たれ得ると思ふ。其の一は在來の諸方針の何れかを固持し、文化社會學の方針には別に注意しないもの、其の二は其の遵奉する在來の諸方針中の何れかを固持すると同時に、文化社會學の方針を排斥せんとするもの、或は文化社會學の方針を排斥して、以て其の遵奉する在來の諸方針中の何れかを益々固守せんとするもの、其の三は其の遵奉する在來の諸方針中の何れかの中に文化社會學の方針を攝取して以て新しき發展を企だてるものである。尙ほ第一の態度に就ては二

三の種類が區別され得る。其の一は文化社會學の方針を全く無視して居るもので、其の二は文化社會學の研究中から、自己に都合よきものは取り入れんとするものである。但し夫れは第三の態度に接近するものにして、其の間に嚴密な區別は立てられない、又強いて之を立てる必要もない。とにかく今日の米國社會學の發達から見て特に注意すべきは第二及び第三の態度であると思ふ。そうして私自身の立場から見ると、私は第三の態度を正當と認めるのである。否な私は米國文化社會學の方針が發達する以前から、其の主張する基本概念及び原理の重要なものを、私自身の立場から解する意味にて、私の社會學の體系中に認めて居たのである。要するに私は私の社會學體系を純粹社會學と總合社會學との二部門に別ち、社會及び文化の具體的諸形態を一般的總合的に研究するものを總合社會學と見る見解を、二十數年前から立て、居たので、かくて私の總合社會學なるものは、或意味にては既に米國文化社會學を含蓄して居るものと見做し得られるのである。併し此處に米國文化社會學論争を考察するに當つて、特に重要視すべきは第二の態度である。是れ云ふまでもなく、米國文化社會學論争は此の態度をとる同國の社會學者と、文化社會學者との間に起れる論争であるからである。

今米國文化社會學論争を考察するに當つて、私の先づ注意したいことは、文化社會學に反對し殊に大に之を排斥せんとする人々が、前節中に擧げたウイレーの論文中にも指摘されて居る如く、

主として心理學者或は社會心理學者の間から起つて居ることである。そうして此の事實は、私の考へる處によれば、世界の社會學の現状から見て、重要な世界的意義を有するものである。要するに米國文化社會學に對して猛烈なる反對が、先づ社會心理學者の一部分から起つて居ると云ふことは、つまり米國文化社會學も、反心理主義或は超心理主義の社會學の一種であることを暗示するのである。そうして反心理主義の社會學は世界の社會學史上、最も早く佛蘭西に於て勃興したので、其の當面の創設者はジュールケムであるが、彼の創設した反心理主義或は超心理主義の社會學、即ち社會學主義の社會學は、今日に於てもやはり佛蘭西の社會學界を支配して居るのである。併しさきにも述べし如く、米國文化社會學は單にジュールケム派社會學を模倣して、或は其の直接の影響によりて起れるものでなく、米國社會學史上の特殊な事情に基いて起れるものであるが、しかも方法論上から見れば根本的に夫れと合致する處あるは、前節中に述べしが如くである。然るに近來獨逸に於て社會學の研究が大に勃興するに當つても、やはり反心理主義或は超心理主義が同國の學問史上の特殊な事情に基いて、大に勢力を振ふて來て居るのである。心理主義に對して廣く論理主義と稱し得られる諸方針、對象論的方針、現象學的方針、精神科學的方針等は、今や獨逸の社會學或は社會哲學を風靡して居ると思はれるが、尙ほ科學としての社會學を確立せんとする人々の中でも、マックス・ウェバーの如きは方法論上心理學と社會學とを嚴密に區

別し、社會學上では一種の反心理主義或は超心理主義を唱へ、更にジムメルの如く、社會心理學者にして社會學者ではないとまで云はれる人でも、ヤハリ方法論上では社會學と心理學とを嚴密に區別せんとしたので、社會學上では一種の反心理主義或は超心理主義を唱へて居たと見做し得られるのである。そうして米國文化社會學はさきに述べし如く、文化は超個人的なるものであると見るに於て、佛蘭西のジューケム派社會學と氣脈を通じて居るが、尙ほ以下述ぶる處によりて知られる如く、記述を特に重要視して、説明もつまりは記述の一種に外ならぬと見る點に於て、又獨逸の反心理主義的、超心理主義的社會學或は社會哲學と氣脈を通じて居るのである。要するに今や歐米諸國の社會學界を通じて、反心理主義或は超心理主義は一大潮流となつて居るので、そうして米國文化社會學も、つまり反心理主義的或は超心理主義的社會學の特殊な米國的一表現と見做し得られるのである。

私は此處で米國文化社會學論争を詳しく論ずる暇はないから、先づ米國文化社會學の方針に對する最とも猛烈なる反對の一例として、オールポートの批判を簡單に述べ、次に之れに對する米國文化社會學者の最新の答辯の一例としてウィルレーの見解を簡單に述べ、終りに又之れに加へられたる批判の最新の一例としてアーベルの見解を述べ、以て米國文化社會學論争の一般を示したいと思ふ。

## オールポートの批判

Allport は本來心理學者であるが、併し今日の多くの米國心理學者と同じく、社會心理學の研究を公にして居る。同書によりて彼が文化社會學に反對する理由は明かに了解されるが、尙ほ彼は幾多の論文を公にして、特に文化社會學を直接に批評して居る。The Group Fallacy in Relation to Social Science, Journal of Abnormal and Social Psychology, 1924. The Group Fallacy in Relation to Culture, ibid, 1924. The Psychological Nature of Political Structure, American Political Science Review, 1925. The Nature of Institution, Journal of Social Forces, 1927. Group and Institution as Concepts in a Natural Science of Social Phenomena, Publications of the American Sociological Society, 1928. 尙ほ此の外に Balz and Port, The Basis of Social Theory の批評 (Liguan, Social Change の批評等) オールポートの文化社會學に對する態度を理解する爲めに有益である。

オールポートが文化社會學に反對する根本的理由は、結局二つに總括されると思ふ。其の一は文化社會學は、彼が文化研究に於ける團體謬論 the group fallacy と稱するものに陥つて居ると云ふこと、其の二は記述と説明とは嚴密に區別さる可きものにして、そうして文化現象の記述或は敘述は文化の言葉に於て與へ得られるが、併し其の説明は必ずやすぐ下の現象水準、即ち心理學的水準の言葉に於て與へられねばならぬものなるに、文化社會學者は右の區別に注意せず、文化現象の説明をも敢て文化の言葉に於て與へんとするは、正當でないと云ふこと。

(1) 團體謬論 オールポートが團體謬論と稱するものは、説明の一原理として、團體内の個人に一の全體としての團體を、置き換へると云ふ誤謬」を意味するのである。彼の考へる處によれば説明の一原理として、個人に全體としての團體を置き換へることは、つまり個人を廢棄し、更に社會學の協力者としての心理學を廢除する誤謬に陷るのである。かゝる見解は一の記述的實體、

一の超實在物を空想的に設定し、之を決定原因として重要視するが故に、行動の現實なる事實としての個人的基礎を全く見失ない、到底之を正當に説明することが出来ない。例へば文化人類學や文化社會學が、文化模型と稱する團體傾向は決して個人から獨立して夫れ自身に於て存在するものでなく、つまりは個人生活の單なる表現に外ならぬものである。實際に於て夫れは個人が強制されると感ずる行動の仕方にして、そうして其の強制或は刺激は只外觀上團體其物から來るだけで、其等の仕方を採用する眞實なる推進力<sup>ドライヴ</sup>は、個人に内具的なものである。かくて團體傾向は只個人の多數が反動す可く意向する仕方としてのみ實在するのであるから、之を全く個人から區別される決定原因として取扱はんとする推論には、當然重大なる謬論が含まれて居るのである。要するに行動の原因は、只個人心理學の言葉に於てのみ言述され得るのである。

(2)記述と説明との區別、オールポートの考へる處によれば、何れの科學によりて研究される現象も、二つの相異なれる見地から近づき得られる。第一は記述の見地にして、第二は説明の見地である。そうして何れの科學も其の完全なるプログラムに於ては、此等の二つの接近形式を共に具有する。併し此處に特に注意す可き本質的な事實は、科學の體統 (the hierarchy of sciences) に於ては一の科學の記述の分野は、直ぐ其の上に位する科學に對して、説明の分野となると云ふことである。科學に於ては記述或は分析と説明或は因果決定との右の區別は、甚だ重要なもの



にして、例へば心理學は情緒、習慣反應、模型化されたる反射運動等々を記述し得る、併し之を説明する爲めには、すぐ其の下に位する神經學の水準に下らねばならぬ。又生理學は種々なる生理現象を記述し得るが、併し之を説明する爲めには物理學及び化學の水準に下らねばならぬ。されば社會學は文化現象を文化の言葉に於て記述し得るが、併し之を説明する爲めには、心理學の水準に下らねばならぬ。然るに文化社會學は文化現象を文化の言葉に於て記述することが、又直ちに之を説明することであると考へて居るので、科學に於ける記述と説明との重要な方法論的區別を覺つて居ない。

オールポートは文化社會學に對して、かなり詳しく批評を加へて居るが、根本的には彼の批評は右の二點に歸着すると思はれる。然らば之に對して文化社會學者は如何に答辯して居るか。

**ウイレーの答辯** 私は右に述べしオールポートの批評に對して、文化社會學者が與へた最近の答辯の一例として、此處に前節中に擧げたウイレーの米國社會學雜誌昨年九月號の論文、*The Validity of the Culture Concept* 中に論述されて居るこの大要を述べて置きたいと思ふ。

(1) 文化社會學は團體謬論に陥つて居ると云ふ非難に對して。今ウイレーは先づ、オールポートが彼が團體謬論と稱するものに陥つて居るとして、文化社會學に加へた非難に答へんと企だてゝ居るが、ウイレーの考へる處によれば、オールポートが右の見地から加へる非難は、つまり文

化複合は個人が夫れに對して反動する刺激と認め得られず、個人の行動を統制する刺激として考へ得られないと云ふことに歸着する。そうしてかゝる見解は、つまり一の社會團體内に於ける諸個人の習慣は、相互作用が何れの一個人の習慣とも異なれる一の習慣集<sup>インテグレーション</sup>結を發達させる様に、相互に關係して居ないと云ふこと、及び一の社會團體内に新たに入り來る個人や、其の内に生れ生長する兒童などは、右の習慣の相互關係(文化複合、團體行動模型)に對して、夫れが彼に於ける習慣の發達の制約的因素となる様には、反動しないと云ふことを意味するのである。併し詳しく事實に就て吟味すると、オールポートの主張することは、何れも正當でないことが學ばれるのである。

抑々團體は夫れを構成する諸個人から獨立する、別な心的生活を有するものでないことは、疑ふ可からざる事實である。併し其の逆、即ち團體に於ける心的生活は全く個人的心理生活を以て充たされて居るので、夫れ以外に何等の心的生活をも含有しないと云ふことが、事實であるとは認め得られない。個人は他の諸個人の集結的反動に對して、明かに反動して居るのである。そうして其等の集結的行動模型は、例へば法律は何れの個人の立場から見ても、明かに個人の行動に對する刺激、實に何れの他の一個人からも生來しない刺激である。文化社會學者が文化は個人の行動を刺激する或は統制すると云ふ場合に意味することは、つまり一個人は他の諸個人の集結的反動に反動すると云ふことに外ならない。

個人は一定の地域内に生まれるか、又は他から其の内に來住するかを問はず、其の内に生活する爲めには、其の團體諸個人に共同的なる諸習慣を學ばねばならぬ。かくて彼は其の各生活狀態に於て、他人即ち團體諸個人の行動によりて制約されて居る併し又彼自身の行動は他人の行動を強める役目を勤め、次代の人々の行動を統制する刺激の一部分となる。そうしてかゝる意

味にて、オールポートが否決するに反して、國民は明かに個人の行動を統制すると云ひ得られるのである。

要するに文化社會學は諸個人の相互的刺激に於て、何れの個人をも押しのけて之れに取つて代り、そして何れの人民の生活様相にも、個人的ではない一の鑄型を與へる一の集結を認めるのである。若し個人は相互に孤立して生存し、そして單に同様な刺激に對して、各自別々に反應するに止まるものならば、オールポートの説は維持し得られるであらうが、併し個人は彼の考へる様に孤立して居るのでない、そして常に共同的刺激に對して反應するに止まらず、更に夫れに反應する如く相互に對しても反應するのである。

(2) 記述と説明との區別に關して。 ウィレーは次に、オールポートが記述と説明との區別から見て文化社會學に加へた非難に答へんと企だてゝ居るが、其の論ずる處によれば、科學に於ては記述と説明との區別は、オールポートの考へる如く本質的に重要なものでなく、説明は記述の特定的一種に外ならぬものである。かくて文化現象の説明とはつまり文化の言葉を以て遂成される文化現象の記述の特定的一種に外ならない。

云ふまでもなく、終極的な第一原因によりて説明を與へんとすることは、科學の任務ではない。そして科學に於て説明と云ふは、つまり一又は數多の現象に就て、豫見が立て得られるだけ充分に精密なる記述を與へることを意味するものに外ならない。記述と云ふは一の廣大なる範疇にして、夫れは何れかの與へられたる現象と結び附いて、又は夫れに先行して、觀察し得られる諸要素の最も粗雜なる敘述から、甚だ多數の變數或は變動し得るものを含有するほど精密なる記述に至るまでを包括して居る。そして後者の度合に達せる記述、豫見點にまで高められたる記述が、即ち説明と稱せられるのである。されば記述と説明とは二つの別々な範疇ではなくして、同一の範疇の只相異なる度合を意味するだけのものである。

更に注意すべきは、オールポートは必要の原理 (the principle of necessity) と稱せらる可きものと、充當或は充足の原理

(the principle of sufficiency) と稱せらる可きものとの區別を立てず、兩者を混同して居ることである。かくて彼は全體が存在する爲めには、全體の一部分が必要である故に、全體は其の必要なる一部分の言葉に於て言述或は説明されねばならぬと論ずる謬論に陥つたのである。心理的因素が行動に必要な一部分であることは云ふまでもない。併し只心理的因素だけで文化的行動を説明するに充分であるとは云ひ得られない。是れ物理的及び化學的因素も、心理的因素と同様に行動に必要なものであるが、併し夫れで文化的行動を説明するに充分であると、云ひ得られないのと同様である。

尙ほオールポートの重要視する記述と説明との區別の誤謬は、他の方面から見て指摘し得られる。即ち自然科學の分野に於ける一定の場合にありては、説明は觀察されて居る現象の言葉に於て與へられて居る、又只其の言葉に於てのみ可能であると云ふ事實から見て指摘し得られる。例へば太陽が昇ることの説明は全く「太陽の昇ること」の言葉に於て與へられて居る。其の説明と云ふのは即ち吾人の宇宙に於ける太陽及び諸遊星の地位の詳細なる記述である。其の場合には、より低き或はより下の水準の言葉に於て與へられると云はれる説明は存在しない、又存在し得ない。同様に身體の一器官の生長は、其の器官の言葉に於て記述されて居るだけでなく、又説明されて居る。そして只其器官が夫れ自身の生長の過程に於て理解されたる時にのみ、説明をより低き水準へ還元することが企て得られるのである。併し其の企だてが達成された時でも、得られたる結果は決して説明の新しい原理ではなく、寧ろ異なる言葉に於て與へられたる記述に外ならないのである。

要するにウイレーの考へる處によれば、科學に於て先づ吾人のとる可き第一步は、現象のより低き水準の言葉に於て説明を與へんと企だてることでなくして、觀察されて居る現象の水準の言葉に於て説明を下さんとするものである。そうして彼は幾多の實例に就て、右の彼の方法論的原理及び必要の原理と充足の原理との區別を論證せんと努めて居るが、終りに彼は左の如くに結論して居る。

「文化現象の研究に於ては、心理學者が社會學者の仕事を補充し得る諸問題がある。殊に一の文化地域内に於ける個人の差異的順應が中心となる諸問題に於て、心理學者の補充的協力は大切である。併し必要な説明を引き出すことに於て、心理學者が殆んど助けにならない、又心理學の知識が何の役にも立たぬ諸問題がある。そうして文化的接近は、團體生活及び團體に於ける個人の行動に關する諸問題の或もの、説明に對して、他の諸接近よりも以上に貢獻するが故に、正當であるのである。」

### アーベルの再批判

Theodore Abel は哈佛大学出身の有望なる新進社會學者にして昨年 *Systematic Sociology in Germany: A critical Analysis of Some Attempts to Establish Sociology as an Independent Science* と題する有益なる著書を公にしたが、米國社會學雜誌本年三月號に *Is a Cultural Sociology Possible* と題する一論文を發表しオールポートの非難に答へたウイレーの論文を參考しつゝ、新たに文化社會學に批判を加へて居る。そうして私はアーベルの批判は文化社會學に對する批判の最とも有力なるものの一と考へるから、此處に稍々詳しく其の概要を述べることとする。

アーベルの見る處によれば、獨立する一科學として主張される文化社會學の基本的前定となつて居るものは、左の四命題である。

- (1) 社會學は文化の研究であること、
- (2) 人間行動は文化の言葉に於て解釋されねばならぬこと、
- (3) 文化は超個人的なるものであること、
- (4) 文化現象は充當的に記述されるならば、夫れで説明されて居ること、

されば右の四命題が眞實であるならば、文化社會學は一の獨立なる科學として可能であるが、然らざれば可能でない。然るにアーベルの考へる處によれば、其等の四命題の何れも正當に主張され得るもの、或は正當に論證し得られるもの、即ち眞實なるものでない。かくて文化社會學は一の獨立なる科學として可能でないのである。然らばアーベルは如何なる理由によりて、其等四命題は正當に主張され得ないと考へるのであるか。

(1) 社會學は文化の研究であり得るか、アーベルは先づ如何なる理由によりて、社會學は文化の研究であると見ること、或は社會學の對象は文化であると見ることが、社會學をして一の獨立な科學として存立することを不可能ならしめると考へるのであるかと云ふに、彼の考へる處によれば、今日社會學の對象を規定せんとするに當つて、吾人の先づ第一に注目すべき點は、社會學を一の獨立なる科學として明かに確立し得る様な現象或は事實を、其の對象として規定すると云ふことである。されば現存する他の社會科學が對象として居るもの、或は其の研究が今日よりも一層よく進歩すれば、當然其の對象となると認めらる可きものを、社會學の對象として規定することは社會學を一の獨立なる科學として確立する仕方ではない。又現存の社會諸科學を總合することによりて始めて取扱ひ得られるが如きものを、社會學の對象として規定することも、即ち社會學を他の社會諸科學の一總合に外ならぬものとなす様な對象規定も、ヤハリ社會學を一の獨立なる科

學として確立する仕方ではない。獨立なる科學としての社會學は、他の社會科學が對象となすものとは異なれる或物を對象となし、且つ他の社會諸科學の一總合とは全く異なれる一科學として規定さる可きである。然るに文化の研究は他の社會科學から獨立して行はれるものでなく、且つ明かに他の社會諸科學の一總合を意味するもの、一の總合的接近を意味するものである。そうして實際に於て文化社會學者や文化人類學者は、他の社會科學の分野に屬する事柄を取扱ふて居るか、又は他の社會諸科學の一總合を企だてゝ居るかであるのである。かくて文化を其の對象として規定する、或は文化の研究であると稱する文化社會學なるものは、一の獨立なる科學としての社會學として建設されて居るのでなく、又到底かゝる社會學として建設し得られるものでない。

アーベルの論ずる處によれば、文化の概念或は意味を注意して考察すれば、先づ文化の研究が他の社會科學から獨立して行はれ得ないことが、明かに理解される。夫れ文化と云ふ語は、人間行動模型の總體を包括するものである。かくて文化諸特徴及び文化諸複合とは、即ち種々なる經濟的、政治的、技術的、宗教的及び其他の活動并に夫れに相應する諸生産物である。そうして其等の種々なる文化的活動及び生産物は文化の諸方面を表はすものにして、其の各々は一の特殊的社會科學の研究の分野となつて居る。かくて文化の全領域は種々なる社會科學或は文化科學の間に配分されて居るので、文化其物に於ては、既に其等の諸科學によりて取扱はれて居る其の特殊的諸表現の外に、新たに研究の對象とされ得る何物も存しない。そうして種々なる文化的諸方面の相互關係及び相互依存も亦獨立なる對象であり得ない。是れ各社會科學は其の對象とする具體的現象の分析に於て、絶へず其等の相互關係及び相互依存を取扱ふて居るからである。尙ほ文化社會學者が呈出して居る諸問題は、實は各社會科學が其の特殊な研究分野に於て起し得る、又起して居る諸問題であるのである。例へば宗教學、政治學、經濟學等は夫れ

夫れ其の對象とする文化諸特徵及び文化諸複合を發生的に研究するのみならず、其等の文化諸特徵及び諸複合の累積、繼續及び可動性等をも分析して居るのである。

されば今、既述の特殊的社會科學が取扱ふのとは異なる仕方にて、文化を研究する仕方としては、只文化の發生、繼續、發明等の一般的理論を構成する爲めに、文化の各方面に於て存在する種々なる文化的過程を、普遍化的に考究せんと企てると云ふが如き一の抽象的接近の仕方が、可能として存するだけである。換言すれば、只文化の根柢に存立する基本的諸原理を發見し、哲學が常に社會に關して呈出する諸問題に答へんと企てると云ふことだけが、可能である。そうしてかゝる抽象的接近は、社會的諸發達及び其の諸過程を組織的秩序的に論述する文化哲學としては、全く正當なるものである。しかし夫れは決して一の獨立なる科學として社會學を建設するものでない。要するに文化の研究が他の社會科學の研究から區別される、一の獨立なる研究として行はれるとすれば、夫れは只抽象的接近によりてのみ可能であるが、然るに右に述べし如く、抽象的接近は本質的に總合的なものにして、又哲學的となり易い。そうして今日の文化社會學は傳來の總合的社會學に比して、實質的に種々勝つて居るが、しかも方法論的には本質的に夫れと異ならないのである。されば文化社會學者が傳來の總合的社會學を排斥し、文化社會學を之れに反對する眞に一の獨立したる科學としての社會學として主張するのは正當でない。

社會學が一の獨立する科學として存立す可くば、夫れは他の何れの社會科學も對象としない社會現象の特殊な或物を其の對象となす可きである。そうしてかゝる特殊な或物として現實に存在するもの、つまり社會現象の特に社會學的な方面、或は人間生活の特に社會的な方面と認めらる可きものは、他の個人との關係に於て行はれる個人の行動或は活動、人間と人間との相互作用、人間と人間との相互行動 *inter-human behavior* である。そうして社會學はかゝる行動、人間と人間との相互作用を對象とするもの、つまり社會的關係及び社會的過程を對象とするものとして、此處に始めて一の獨立なる科學として建設し得られ、存立し得るのである。

(2) 人間行動は文化の言葉に於て解釋され得るか、文化社會學は人間行動は文化の言葉に於て解



釋されねばならぬと主張するのであるが、アーベルは此の主張もヤハリ其の儘では正當でないと考へて居る。そうして彼の論ずる處によれば、文化社會學はつまり與へられたる一の行動模型は、行動する個人が依て以て反應する文化的要素が明示されるならば、夫れで充分に理解されると認め、そうして此の見解は、人間行動は只一定の仕方にて行動す可く個人を強制する個人の内具的推進力 (the drive inherent in the individual) が、何であるかど確かめられたる時にのみ、充分に理解されると見る見解に反對して、正當に又完全に人間行動を説明するものであると主張するのである。併し右の二種の見解は何れも完全ではないので、個人の内具的推進力及び確立されて居る反應模型は、各々只夫れ自身だけで作用するとしては云ふまでもなく、相合して協力するとしても、尙ほ吾人は夫れによりて充分に人間行動を理解し、豫見することが出来ないのである。

推進力は總ての個人に内具的なものにして、何れの時代及び何れの社會的狀態に於ても同一である。併し各推進力に一種又只一種の反應が相應するだけでない。時及び場合が異なれば、同じ推進力から異なれる反應が起り得る。併し其等の相異なれる反應は、只其の推進力に結び附けて考へられるだけでは説明し得られない。是れ其の推進力は恒定不變なものであるからである。云ふまでもなく、推進力の知識は反應の性質を一層充分に理解する爲めに有益である。併し夫れは推進力の特殊的表現を説明し得ない。然るに社會生活の研究者が特に理解せんと努めるのは、まさしく其の特殊的表現、反應に於ける差異である。かくて社會生活の研究者は更に個人の外部に其の充當的な説明因素を探索せねばならぬ。そうして此處に文化社會學が現はれて、其の個人の外部にある説明的因素とは即ち文化的要素であると主張して來たのである。併し文化的要素は文化社會學の主張する如く果して充當的説明因素であるか。

文化的要素とはつまり團體行動の型である、即ち一の與へられたる團體或は文化地域に於て、一般に行はれる反應の仕方である。かくて人間行動の與へられたる場合を研究するに於て、夫れは一般に行はれる一の反應極型に従ふことを知り、又其の模型が如何程一般に行はれて居るかを確かめることが肝要である。併し夫れだけでは其の行動を理解するには決して充分でない。吾人は更に、何故に個人が一般に承認されて居る行動模型に従ふのであるか、又何故に彼は時には夫れに背いて行動するのであるかを知らねばならぬ。例へば各社會團體に於て、一の制度としての法律に對する反應は嚴密に固定して居るが、併し何故に個人は或時には之れに従ひ、或時には之れに従はないのであるか。此處に行動の眞實なる決定者として、他の因素が含まれて居ることが覺られる。そうして其等の他の因素とは、即ち行動する個人(數個人)と、其の行動に直接又は間接に結び附いて居る個人(數個人)との間に存立する諸關係である。

行動の總ての場合に於て、現存する諸關係と、個人と個人との相互作用とが、個人或は諸個人が如何なる特殊な行動模型に従ふであらうかを決定するのである。云ふまでもなく個人は或推進力によりて發動し、一般に行はれる行動模型の一に従ふ。併し個人が現實に何れの行動模型に従ふて行動するかを現實に説明するものは、當面の社會學的状况に於て求めらる可きである。推進力及び文化的要素を見出すことは肝要であるが、併し社會的關係及び過程を分析し、夫れが如何なる特殊な行動模型に従ふ可く個人を導くかを示すことは、一層肝要である。換言すれば「文化的なるもの」と「個人的なるもの」の外に、兩者の枠組の内に行はれる社會生活の運動を表示し、かくて行動の理解の基礎を與へる處の、「社會學的なるもの」の範域が存立するのである。

されば個人心理學の言葉に於て與へられる解釋も、亦文化の言葉に於て與へられる解釋も、何れも不充分なるものであることは明白である。此等の解釋に於ては、個人的でも亦超個人的でもなくして、相互個人的(inter-individual)である處のものの意義は、全く看過されて居る。然るに推進力は、個人と個人との間に存立する關係によりて決定されて居る行動模型に於て發動するものにして、そうして確立されたる行動模型は、社會學的状况如何によりて或は從はれ、或は從はれないのである。要するに相互個人的方面は常に基本的である。是れ只夫れの把握のみが、人間行動の充當的理解及び豫見に吾人を導くからである。

併し右の見解に對して、相互間的行動、人間と人間との行動は、特殊な社會學的要素を保有せず、本質的には只心理的及び文化的事實を含有するだけであると云ふ駁論が起り得る。今社會學者が研究する狀況 (situation) が、心理的及び文化的事實を保有すると云ふことは眞實である。併し社會學的解釋は此等の事實の言葉に於て與へらる可きでなく、狀況が表はす文脈或は前後關係 (context) の言葉に於て、即ち多數の要素の相互關係及び相互依存から成立する處の、行動と反應との連鎖 (the action-response sequences) の言葉に於て與へらる可きである。文脈の一部分として心理的要素又は文化的事實を取扱ふことは、解釋の基礎となるものは其等の個々の要素ではなくして、文脈其物である場合には、心理學的又は文化的解釋を意味しない。されば嚴密に社會學的と稱せらる可き要素が存在するや否やと云ふ問題から離れて、社會學的解釋は心理的及び文化的事實を利用する時でも、心理學的及び文化的解釋の何れとも異なる一の特異な解釋である。

以上述べし處によりて、人間行動は文化の言葉に於て充分に解釋し得られないことが、覺られると思はれるが、併し社會的行動の解釋に對して文化的接近が不充分であると云ふことは、一般的に文化的接近を無効ならしめるものでないことに注意せねばならぬ。文化的接近は一の方法として、其の嚴密なる限界内にありては正當である。そうして此の限界は、文化の言葉に於て文化を研究すると云ふ、其の定義の意味によりて設定されて居る。此の定義は文化的諸要素は相互に依存し、相互に制約すると云ふ正當なる前定に基いて立てられて居る。そうして此の相互的連結は、一の特殊的團體行動模型が説明する可き場合には、常に研究する可きである。併し此の事は、文化的接近は一の獨立な社會科學の基礎として用ひ得られると云ふことを意味しない。既に述べし如く、何れの社會科學も、夫れが研究する特殊の特徴及び複合を説明せんとするに當つては、文化的接近法を併せて用ひる可きであり、又現に用ひて居るのである。

(3)文化は超個人的であるか、アーベルは文化は超個人的なるものであると見る文化社會學の見解も、やはり正當でないと考へるのであるが、彼の論ずる處によれば、文化社會學者が文化は超個人的なるものであると云ふのが、只文化的諸要素は個人の多數に共同的な習慣であることを意味

するだけであるならば、何人も之れに反對しない。併し文化社會學者は夫れ以上を意味して居る。そうして文化的要素は一の刺激であること、即ち個人を強制し、統制し、或は拘束すること、及び夫れは何れの個人からも獨立して存在することを主張するのである。然るに詳しく深く事實に就て考究すると、文化的事實は決して行動に對する刺激でなければ、又個人の外に存立するものでもないことが證明されるのである。

先づ文化的事實は行動に對する刺激であるとする文化社會學の見解に就て、アーベルが論評する處によると、既に述べし如く、行動の相互個人的方面は充當的行動分析の基本的なるものにして、何れの行動模型が採用されるかを決定するものは社會學的狀況である。されば文化的事實は決して一の刺激ではなく、そうして行動に對する刺激は、個人の行動を制約する社會的過程及び關係から與へられるものであることは明白である。換言すれば個人は只彼が相互的に作用し、相互的に關係する他の個人の行動或は豫期される行動に對してのみ、社會的行動を以て反應するのである。

右の社會學的解釋は、之を文化社會學の文化的解釋と比較すると、方法論的にも亦實際的にも重要な意義を有することが認められる。方法論的に考察すると、社會學的解釋は社會的統制の分析に、唯一の充當的接近を與へるものである。是れ其の解釋は集結されたる行動模型の行なふ統制の裏面にある或物を究明するからである。そうして其の解釋によりて見れば、統制、或は強制或は拘束は文化的事實に屬する或物とは認め得られないので、夫れはつまり社會的關係に於て行はれる一定の過程を特質附けるものである。實際的に考察すると、社會學的解釋は強制の問題の性質及び複合性に對して必要なる洞見を與へる。例へば法律は個人が反應する一の刺激であるとする文化社會學の概念は、米國に於ける幾千の法律制定や、戰爭廢止の觀念や其他のものに於て現はれる推論の誤謬の基礎となつて居ることが、容易に理解し得られる。法律も亦何れの他の集結されたる行動模型も、決して夫れ自身で刺激であるのでない。されば社會學的解釋の實際的意義は、夫れは社會學的分析の必要を指摘

することによりて、社會的變動の企圖に對する唯一の充當的基礎を與へると云ふことに於て、認められるのである。

次に文化的事實は何れの個人からも獨立して存在するものとして、取扱はれ得ると見る文化社會學の見解に對して、アーペルの加へた論評によると、一定の場合には例へば文化的事實の相互的依存を研究せんとする場合には、吾人は文化的事實を夫れ自身に於て取扱ひ得る。併し現實には文化的事實は何れの個人からも獨立するものでなく、又何れの個人に對しても外在的なものでない。文化的事實はつまり一般に行はれる個人的反應を現はすものにして、そうして一個人によりて夫れが實現されることは、其の一個人と他の諸個人との關係に制約されて居るのである。尙ほ文化的事實を、之を實現する個人から抽象することは、一定の場合には正當であるとするも、それが爲めに文化的事實の存在の様相を、超個人的と見んとする必要はない。抽象の方法は抽象されるものゝ存在の性質に拘束されない。單に言葉の彩としても、かゝる場合に超個人的と云ふ語を用ひることは可くない。文化的事實の存在の性質に關する何れの主張或は要求も、常に誤解を起す端緒であつたことは、社會學研究者の熟知する事實である。そうして文化的事實を超個人的と稱することは、種々なる誤解が避けられない存在の様相を、有意的か無意的かに之れに認めることになる。但し是非必要であるならば、マックス・ウェバーが提示せる如く、チャンススの概念を適用することによりて、文化的事實の性質を表示するのが、最善の仕方と思はれる。要するに文化的事實は、個人の中又は外に「存在」を有するのでなく、行動の一定の種類が個人によりて起るであらうと云ふチャンス或は蓋然性を、單に表出するだけである。或文化的事實に對しては、其の個人的實現の蓋然性は、他の文化的事實に對してよりも大である。されど何れの場合にありても、個人から抽象して考へられる文化的事實は、與へられたる事情の下では、個人は一定の仕方にて行動するであらうと云ふチャンスをも、單に表はすだけのものである。そうしてかく考へることによりて、「超個人的」と云ふ語が惹起する種々なる誤解が避けられる。更にチャンススの概念は、社會現象に關する實體論と名目論との論争を無用ならしめ、そうして行動の蓋然性或は確率を決定する諸因素の探求を示唆すると云ふ意味にて、又建設的である。と云ふのは既に述べし如く、行動の蓋然性或は確率を決定する因素を探索すると云ふのが、即ち社會學的分析の任務であるからである。

#### (4) 充當的記述は説明であるか、終りに充當的記述が即ち説明であると見る文化社會學の見解に

對して、アーベルの加へた論評を考察するに、此の見解はさきに述べしが如く、オールポートの非難に對する文化社會學者の答辯によりて、方法論的に明亮に論述されて來たものであるが、今アーベルの考へる處によると、文化社會學者の立場は、充足性(或は充當性或は充分性)を強調することによりて、オールポートの論辯中、説明の爲めに實在のより低き水準に下る必要を強調する部分の正常ならざるを論證する限り正常である。一の現象の下にある「より低き水準」の諸要素は、其の充當的説明の爲めに常に必要であるのでない。フアイヒンガーの云ふ意味にて、原因的諸因素の一の完結的體系と云ふ有益なる假想<sup>フイクチオン</sup>は、完全なる因果的説明の爲めに無限に下る(或は遡る)論理的必要を、實際上なくするのである。

しかも記述と説明との間の本質的差異は、毫も損傷されずに存續する。記述は只一の方法であるに止まるが、説明は一の論理的過程である。記述は一の與へられたる現象中に種々なる何物が存在するかを述べるが、説明は其等の物の間に見出され得る關係或は連結を取扱ふ。説明は現象は何故にあるが如くにあるかを示すものである。説明の「理想的定型」<sup>アイディアル・タイプ</sup>は法則の適用である。記述は夫れ自身によりて、何等の判然たる限界をも設定しない。是れ各現象は宇宙間に於ける總ての他の現象と、如何様にか關係し、交錯して居るからである。そうして説明の論理的過程が、因果的に重要な連結或は關係に吾人の注意を集中させることによりて、吾人をして一定の選擇を

行なふことを可能ならしめる。かくて夫れは記述に對して適當なる限界を設定し、そうして充當的或は充分なるものを決定する。されば記述と説明とは二つの全く相異なる過程であることは否まれ難い。そうして兩者を同一のものと見る意味を含む何れの見解も、正當でないと云はねばならぬ。

アーベルは以上述べ來りしが如き理由にて、文化社會學は可能でない、詳しく云へば一の獨立なる科學としては、文化社會學は可能でないと論斷したのである。

## 五 米國文化社會學批判

前節に述べし處によりて、米國文化社會學に關する今日の論争は、如何なる問題を中心として行はれて居るかは明かに學ばれ得る。要するに夫れは左の三問題を中心として行はれて居るのである。即ち

- (1) 社會學は文化を對象とするものとして、或は文化の研究として、果して一の獨立なる科學として可能であるが、
- (2) 文化は超個人的なるものであるか、
- (3) 記述と説明とは論理的に同一のものであるか、又は區別さる可きものであるか、

併し此等の三問題は、社會學方法論の一切の主要問題を自から伴なふものであるから、夫れに關する論争に於ては、社會學方法論の殆んど一切の主要問題の論議が含有されて居る。かくて今日の米國文化社會學論争を詳しく批判せんとするに於ては、社會學方法論の一切の主要問題に關する私の見解を論述せねばならぬこととなる。併し夫れは到底此處でなし得ないことであり、又私はさきに本雜誌に於て公にせる諸論文（昭和三年七月號「一般社會學の概念」、同八月號「特殊社會學概念の批判」四年一月號「包括社會學概念批判」、同二月號「綜合社會學概念」、同三月號「總合社會學概念」）に於て社會學方法論の諸問題を論究して居り、更に本雜誌に於て次に公にせんとする「數學的經濟學の方法論的批判」に於ても稍々詳しく論究したい積りであるから、本論文に於ては只特に右の三問題に就て、米國文化社會學論争を簡單に批判するに止めたいと思ふ。

(1) 文化の研究としての社會學の可能性問題、先づ注意す可きは、米國文化社會學者も亦夫れに反對する社會學者も、共に文化の哲學的研究或は社會哲學や文化哲學より區別して、社會學を一の獨立なる科學として建設せんと努めて居ることである。是れば私の多年努力して居る仕事であり、且つ近年は其の學問論基礎附けに専ら力を注いで居るものであるから、其の點に於ては私は大に其等の米國社會學者に共鳴して居るのである。併し私は社會學を一の獨立なる科學として建設する爲めには、先づ第一に科學の一の新しき部類を設定し、之を學問論的に充分に基礎附ける



ことが必要であると考へて居る。そうして米國文化社會學者も亦反對社會學者も、其問題を全く無視して居るのでないことは、本論文第二節中に述べしクレバーの「十八ヶ條の宣言」を見ても亦前節中に述べし如く、アーベルがマックス・ウェーバーの社會學論や、ファイヒンガーの「かの如く哲學」を引證して居るのを見ても推察される。しかも彼等は社會學方法論を學問論上より深く又組織的に論究して居ない。殊に社會學を一の獨立なる科學として確立する爲めに必要と思はれる、一の新しき科學部類の構成には殆んど注目して居ないと思はれる。かくて彼等は一の獨立なる科學としての社會學の可能性問題を、主として簡單に或は素朴的に、社會學は社會現象或は文化現象の如何なる種類或は方面を對象とすることによりて、一の獨立なる科學として可能であるかと云ふが如き問題として論究して居る。そうして文化社會學者は文化人類學の方法に従ふて文化を一般的に研究することは、或は文化現象の一般的方面を對象とすることは、心理學的行動主義よりも勝れて、充當的に人間の一切の行動を説明し得るが故に、又傳來の社會學の如く、社會學を社會諸科學の一總合或は一哲學に化成するものでないが故に、社會學を一の獨立なる科學として建設し得ると主張して居る。然るに之れに對して、オールポートの如きは、文化によりて人間行動を説明せんとすることは、人間行動の現實なる心理學的基礎を見失ふ或は無視するが爲めに、到底之を充分に説明し得ないとして反對し、又アーベルの如きは、文化の研究としての文

化社會學なるものは、他の社會科學の領域を侵さない以上は、只文化を抽象的に研究するより外に途はないが、然るに文化の抽象的研究とはつまり其の總合的又哲學的研究に歸着するものにして、方法論的には傳來の社會學と異なるものでないとして反對して居る。

先づオールポートの反對に就て考へるに、夫れは確かに意義あるものである。社會學は決して心理學から全く獨立し得るものでない。そうして一時、社會學は心理學から全く獨立する一の自律的科學であると強く主張して居た佛蘭西のブュケム派の社會學者も、近來心理學の重要を認めて來たことは、注意す可き傾向である。(Marcel Mauss, *Rapports réels et pratiques de la psychologie et la sociologie*, *Journal de Psychologie*, 1924, Daniel Esserier, *Psychologie et Sociologie*, 1927) 尙ほウイレーの如きは前節中に述べし如く社會學の或問題に關しては、心理學の重要なを認めて居る。されば少なくとも今日では、オールポートの考へる如く、總ての文化社會學者は全然心理學を排斥するのではない。しかもオールポートの如くに、社會現象或は文化現象の研究に於て心理學を偏重するに於ては、結局社會學は心理學の一章、或は其の一附隨物、或は其の應用學科の一となつて仕舞ひ、一の獨立なる科學としては到底成立し得なくなる。されば文化社會學者はウイレーの主張する如く、文化現象に於ける相互人間的關係或は人間の相互作用、即ち私が心と心との相互作用及び相互關係と稱するものゝ重要を、根本的には大に強調するのは當然である。

但しさに述ぶる處によりて知られる如く、文化社會學は心と心との相互作用及び相互關係を、根本的には大に重要視して居るが、併し當面に最も強調して居るのは、心と心との相互作用及び相互關係の集結、即ち夫れが文化と稱するものである。さればアーベルの主張と、少なくともウイレーの如き文化社會學者の主張との差異は、少なくとも其の一方面に於ては、社會的關係及び社會的過程即ち私が心と心との相互作用及び相互關係と稱するもの其物を當面に重要視して、直ちに之を社會學の對象と見るか、又は其の集結、或は廣義に於て其の生産物と認められるものを、當面に重要視して之を社會學の對象と見るかの差異に歸着すると思はれる。そうして後に述ぶる如く私は早くより兩者を包括して社會學の對象と認めて、社會學の一體系を建設する爲めに力を注いで居るのである。

次にアーベルの反對に就て考察するに、彼はさに述べし如く、文化社會學は一の獨立なる科學であらんとする以上は、文化を抽象的に研究せねばならぬが、併し文化の抽象的研究は結局總合的及び哲學的研究となつて仕舞ふので、其の外觀に於ては、文化社會學は傳來の社會學と異なつて居る様に思はれるに拘らず、實質的には傳來の社會學と異なつて居ないので、ヤハリ總合的及び哲學的なものであつて、決して一の獨立なる科學ではないと論するのである。併し此處に注目す可きはアーベルは總合的であると云ふことゝ、哲學的であると云ふことゝを殆んど同一視し

て居ることである。そうして傳來の社會學に於ては確かに兩者は合致して居る。又文化社會學に於ても、アーベルが深刻に指摘して居る如く、兩者は屢々合致して居る。されば彼が總合的と哲學的とが合致して居る點から見て、文化社會學は一の獨立なる科學として建設されて居ないと評することは正當である。私も其の點から見て、文化社會學はまだ完全に一の科學として建設されて居ないと認める。併し方法論上、總合的と哲學的とは當然合致す可きもの、或は合致せねばならぬものであるか。私はそうは考へない。そうして文化を科學的總合的に研究するものとしての社會學は、一の科學として、嚴密に云へば一の科學の一部門として、正當に成立し得ると考へて居るのである。

私は總合的考察に哲學的と科學的とを區別し、哲學的總合考察に對立して科學的總合考察は存立すると考へるのである。併し此處で科學的總合考察一般の論理的構造を詳しく論述することは出来ないから（但し次に公にせんとする「數學的經濟學の方法論的批判」の中に少し詳しく論述する積りである）只社會現象の研究に就て其の眞髓を極簡單に一言するだけに止めるが、要するに私は經驗的事實として現實に存立する諸般の社會現象或は文化現象の相互依存關係或は函數連結を、其の儘に考察するのが、即ち社會現象に關する科學的總合考察の眞髓であると見るのである。そうしてかゝる意味にて、文化は科學的總合的に考察し得られるものと認め、又文化のかゝる科學的總合的考察を行なふのが、即ち私が社會學體系の一部門と見る總合社會學の任務であると考へるのである。

文化社會學は根本的には、心と心との相互作用及び相互關係の重要を充分に承認しながら、しかも社會學の任務を其等の作用及び關係其物を直接に研究することに認めずして、廣い意味にて其等の作用及び關係の生産物と見らる可き文化を研究する

ことに認めて居ると思はれるが、之に反してアーベルの如き社會學者は其等の作用及び關係其物の研究を、又只其の研究だけを社會學の任務と認めるものと思はれる。併し私は兩者何れも一方に偏する見方であつて、社會學は其等の作用及び關係其物も、又廣い意味にて其の生産物と見られる文化も、合せて研究す可きものであると考へる。かくて私は心と心との相互作用及び相互關係其物を直接に研究する社會學の部門を、純粹社會學として築き上げ、又廣い意味にて其等の作用及び關係の生産物と見られる社會及び文化を研究する社會學の部門を、總合社會學として築き上げんとするのである。

アーベルはさきに述べし如く、文化の研究としての社會學は、他の社會科學に屬する或は屬す可き問題を研究して、他の社會科學の領域を侵すか、然らずば文化を抽象的に研究するより外に途はないが、併し前者の途をとるとしては云ふまでもなく後者の途をとるとしても、つまりは總合的及び哲學的な研究となつて仕舞ふから、到底一の獨立なる科學として存立することは出来ないとい論じて居るが、其の際彼は種々なる文化的方面の相互關係及び相互依存の研究も、何れの社會科學も其の特殊の領域内に於て行なふて居るものにして、夫れは諸般の社會科學に屬する、又は屬す可き仕事の一種であると認め、かくて其等の相互關係及び相互依存即ち私が函數的連結と稱するものは、特殊な社會科學特有の對象となり得ないものであると論斷して居る。さればアーベルは私が總合社會學と稱するものを否定して居るのである。併し文化的諸方面の相互關係及び相互依存即ち函數的連結は、一の特殊な社會科學の特有の對象と認められないと云ふ理由を、彼の述べし如くに論ずるに於ては、同じ理由に従ひ、同じ論法に従ふて、彼が一の獨立なる社會科學として社會學を確立す可き其の唯一の對象と見る社會的關係及び社會的過程、即ち心と心との相互作用及び相互關係も、ヤハリ他の總ての社會科學が夫れ夫れ其の特殊の領域内に於て研究するものにして、特殊な一社會科學の特有の對象となり得ないと云はねばならぬ。是れ何れの特殊の具體的文化現象も、社會的關係及び社會的過程によつて或は於て存在し變動するものにして、又何れの社會的關係及び過程も、何れかの特殊の具體的文化現象に於て現はれて居るので、特殊の具體的文化現象を離れて現實に存在するもの、行はれるものでなく、かくて何れの社會科學の特殊の領域に於ても研究されて居るものであるからである。要するに私はアーベルが、社會的關係及び過程を社會學の特有の對象と見るのと同じ理由によりて、彼が文化的諸方面の相互關係及び相互依存と稱するもの、即ち私が社會現象の函數的

連結と稱するものを、やはり社會學の特有の對象と見るのである。

尙ほ私は文化の概念を哲學的文化概念と科學的文化概念、即ち哲學的に規定されたる文化概念と、科學的に規定され文化概念とに區別し、社會哲學又は文化哲學は前者を對象とするものであるに對して、社會學は後者を對象とするものであると見る見解からして、獨逸文化社會學と米國文化社會學との類似或は一致と差異或は差別とを論述したいと思ふて居たが、最早其の暇はないから、他日の機會に譲る。又本論文第二節の終りに述べしエルウツトの見解に就て、私の見解と一致する點と差異する點とを論述して、一方に於ては私の見解を確かめると同時に、他方に於てはエルウツトの見解の不完全或は不充分なる諸點と思はれるものを指摘したいと思ふて居たが、是れも最早餘白はないからやはり他日の機會に譲る。

## (2) 文化の超個人性問題 今文化は超個人的なものであると見る文化社會學者の見解の眞意が、

前節中に述べしウイレーの解釋するが如き意味のものであるとすれば、夫れは直ちにオールポートの云ふが如き團體謬論であるとは云ひ得られないが、併し實際に於てウイレーの解釋するよりも以上の意味に、之を解釋して居る文化社會學者や文化人類學者のあることは疑はれない。尙ほウイレーの解釋するが如き意味にても、文化社會學者はあまりに文化の決定主義的作用を強調する弊は確かに存在する。抑々文化的事實が一度確立されたる上は、一般に大なり小なり個人を強制し、或は統制し、或は拘束する力を有することは、疑はれない事實である。そうして或文化的事實にあつては、其の強制力或は拘束力は甚だ大なるものである。此の事は米國文化社會學や米國文化人類學が現はれる以前に於て、社會的事實の強制作用を、其の最も量要なる外部的特徴

として偏重せるヅールケム及び彼の學派の社會學者が、既に充分に證明したものである。そうして其の事實に基いて其等の佛蘭西社會學者は、ヤハリ社會的實在の外在性、即ち個人意識の外に又上に獨立に存在すること、つまり超個人性を主張したのである。然るに米國文化社會學者の云ふ文化の超個人性なるものも、つまりはウイレーの解釋する如く、文化は個人に對して刺激となること、即ち個人を強制し、統制するものであること、及び個人に對して外在的なものであることを意味するに外ならぬとすれば、夫れはヅールケム派の集團意識と根本的に一致して居るのである。かくてヅールケム派の集團意識說に加へられる批評は、少なくとも大體上其の儘に米國文化社會學者の文化超個人性說に移し得られるのである。（本雜誌昭和四年一月號の拙稿）  
（包括社會學概念批判）參考

今米國文化社會學者の文化超個人性の概念は、ウイレーの解釋するが如き意味以上の意味を有するものでないとするも、夫れはあまりに文化の決定主義的作用を偏重するが爲めに、個人意識の能働作用を大に或は全く無視する結論に陷つて居る。そうして文化的事實の成立及び變動を、全く或は主として、文化的事實の言葉に於て説明せねばならぬこととなる。是れは社會的事實は全然社會的事實によりて説明さる可きものと見る、ヅールケム派の社會學の原理と大體上一致するものにして、隨ふて又夫れに加へられると大體上同じ批評を受けなければならない。（包括社會學概念批判）（參考）（そうして私はアーベルが文化超個人性の概念に加へた批評には、注目す可き重要な

るものがあると思ふ。

アーベルはさきに述べし如く、文化社會學者が文化的事實は行動の刺激であると見るのは正當でないので、個人の行動に對する刺激は、個人の行動を制約する社會的過程及び關係から來るものにして、決して文化的事實其物が刺激となるのではないと考へるのである。そうしてアーベルの此の考へは、深い意義を有するものと思はれる。自然的或は物理的事實は、人間行動に對して夫れ自身で直ちに刺激となるが、併し文化的事實は人間行動によりて與へられるものとして、人間行動の刺激となるのである。かくて文化的事實が個人を強制し、統制し、或は拘束する力は、之を個人に與へる、又は與へさせる人間の力に基因するので、文化的事實其物が夫れ自身に有するのではないと思はれる。私はかゝる意味に解してアーベルの見解に深い意義を認めるのである。併し又自然的或は物理的事實が夫れ自身で刺激となるに準じて、文化的事實も夫れ自身で刺激となると見做して、文化社會學者の如くに之を取扱ふも、文化的事實は本來人間の生産物或は心と心との相互作用及び相互關係の生産物（廣い意味にて）であることを忘れない以上は、別に差支はないと思ふ。

アーベルは又文化は個人から獨立して個人の外に存在するものと見る文化社會學の見解に就てさきに述べし如く、如何様にか文化的事實の存在的性質を規定することは種々なる誤解を生ずる恐れがあると考へて、マックス・ウェーバーのチャンス（Chance）の概念を應用し、文化的事實は個人の内にも亦外にも、何等の存在を有するものでなく、單に個人によりて一定の行動が起るであらうと云ふチャンス或は蓋然性を表示するに過ぎないものであると論じて居る。此の見解も文化を純科學的に研究せんとするに當つて、形而上學的概念の混交を避ける爲めには、有益なる一の見方である。併し私は私のかねて主張する如く、文化的事實を以て、個人意識の實質的内容の一部分を構成するものと見ることも亦、夫れ以上に形而上學の意味を賦與しない以上は、科學的研究に於て何等の弊害も生じないと思ふ。否夫れは文化に形而上學の意味を給附し、即ち文化の形而上學の意味給附を行なひ、之を形而上學的に考究する可能性を保留すると云ふ點に於て、アーベルの見方に勝つて居ると思ふ。但し私は科學としての社會學に於て、形而上學的概念の混交を極力排斥せんとするが、併し吾人は社會或は文化に就て、只科學的知識を獲得するだけで決して満足するものでなく、其の形而上學的考察或は意義究明を必然的に要求するものであると考へ



て、決して社會形而上學其物を排斥せず、否な大に之を重要視して居るのである。

(3) 記述と説明との關係問題 オールポートは記述と説明とを、現今の自然科學の立場から見ても、嚴密に區別し、そうして文化社會學は此の區別を無視するものとして非難を加へたが、之れに對してウイレーは説明はつまり記述の一種にして、兩者は根本的に區別されるものでないとして文化社會學の立場を辯明せんとして居る。そうしてアーベルはオールポートの立てた區別は正當でないが、併し又ウイレーの如くに兩者を根本的に同一視せんとするは謬見にして、記述は一の方法であるが、説明は一の論理的過程であるとして、嚴密に區別する可きものと見るのである。

記述と説明との關係に關する右の論争は、社會科學方法論の最とも根本的な問題に觸れて居るので、此の論争を批判するには、私の社會科學方法論の根本思想を詳しく論述せねばならないが、併し本論文に於ては最早其餘白はなく、且つ次に公にせんとする「數學的經濟學の方法論的批判」中には夫れに就て少しく論述したいと思ふから、此處では只極簡単に右の論争の方法論的意義を述べるに止める。

オールポートが、記述と説明とを區別し、一の科學の説明原理或は因素は、ナグ其の下に存立する他の科學に於て求めらる可きであると主張する見解は、近世自然科學の方法論的根基本原理の一として物理的諸科學にありては、驚嘆す可き効果を奏せるものである。併し夫れは既に生物學的諸科學にありては疑はしきものとなつて居るが、心理學や社會科學或は文化科學にあつては益々疑はしきものとなつて居る。かくて生物學や地理學や人類學等の原理によりて、社會現象を根本的に説明せんとする所謂生物學的社會學、地理學的社會學、人類學的社會學等々と稱せられるものは、今や大に衰微して居る。但し社會現象の條件として、生物學的、地理學的、人類學的事實の重要なるは云ふまでもない。そうして今日の社會學者でも之を重要視しな

いものは一人もあるまいと思ふ。併し夫れは其等の科學の原理を、社會現象の説明原理と見ると云ふことは、方法論上根本的に異なる意義を有するものである。尙ほ心理學の原理によりて社會現象の根本的説明を行はんとする所謂心理學的社會學なるものも、今日では如何に社會學者間に勢力を失なふて來たかは、上に述べし如く、文化社會學者ウイレーも亦其の反對者アーベルも共にオールポートの心理學的社會學の方針を排斥して居ることによりても察知される。されば私も社會現象の説明には、心理學の知識の重要なこと、殊に直接には最も重要なことを認めるに拘らず、心理學の原理を直ちに社會現象の最も根本的な説明原理と見ると云ふ意味にては、心理主義を排斥するのである。

ウイレーの、記述と説明とを區別せず、比較的に最も精密なる記述が即ち説明であると見る見解は、社會學上ではギッディングスが最も早く唱へ出したものであると思ふが (Giddings, *Democracy and Empire*, 1900, p.p. 45-47) 併しギッディングスの云ふ意味とウイレーの云ふ意味との間には重要な差異があると思はれる。そしてウイレーの見解は、千八百八十年代に社會現象は社會的に説明される可きものなるを始めて主張せるグムプロヴィクツの見解や、又社會的事實は社會的事實によりて説明されることによりて、社會學は始めて一の自律的科學として成立するものなるを主張せるツェルケムの見解など、氣脈を通ずるものと思はれる。併し又ウイレーの見解はグムプロヴィクツやツェルケムの見解とも、完全に合致するものでないと思はれる。要するにウイレーの見解は、形式的にはギッディングスの如く、説明は記述の一種であるとして、兩者を根本的には同一化すると同時に、實質的にはグムプロヴィクツやツェルケムの如く、社會的事實によりて社會的事實を説明せんとするものであると思はれる。そして私はウイレーの見解にも重要な意義を認めると同時に、方法論上記述と説明とはヤハリ區別される可きものと見るのである。其の理由は終りにアーベルに加へる批判中に述べることとする。

終りにアーベルの、記述は一の方法にして、説明は一の論理的過程であると見て、根本的には兩者を區別せんとする見解を考察するに、先づ彼が記述は一の方法であると云ふ場合に、方法を粗雑な通俗的な意味に解せんとするに止まつて居ると思はれるが、併し今日の方法論から考ふれば、記述心理學の方法は云ふまでもなく、現象學的方法の本質直觀も、言葉に於て表はされる以上は、記述の一種である。否な最も深奥なる記述である。そして夫れによりて物の本質が把握されると考へられ

て居るので、かくて物の本質は記述さる可きものとなるのである。そうして記述の一般的概念にかゝる種類の記述をも含ませて考へるに於ては、記述はアーベルの云ふが如き意味で、單なる一の方法に過ぎないものではない。併し現象學的方法の本質直觀或は本質記述の如きものを、直ちに科學としての社會學に適用することは出来ない。若し之を敢てすれば、社會學は社會哲學に化し、科學としては存立し得なくなる。しかも社會學が生物學や心理學の隸屬者とならずして、一の獨立なる科學として存立する以上、其の對象とする社會現象は夫れ自身特有の或物、即ち一切の他の現象から區別される一定の基本的或は元素的事實（普通に社會學者はかゝる事實を本質と稱するが、併し私は今日の學問界の状態に於ては、本質と云ふ語は其の哲學的意味に解され易いから、なるだけ此の語を避けたいと思ふ）を保有せねばならないが、其の基本的或は元素的事實は記述されるより外に之を把握する途はないから、吾人は科學としての社會學に於ても本質直觀或は本質記述に似て居るが、併し之れと區別される一定の純科學的な記述法を用ひねばならぬ。要するに社會現象をあるがまゝに社會現象として、直ちに説明す可き其の最とも基本的或は元素的事實は、一定の純科學的記述法によりて確立されねばならぬ。されば社會學にありては、記述はアーベルの考へる如く、説明される、又説明によりて限界を決定される材料を與へる單なる一の方法に過ぎないものでなく、實に説明の根本原理を確立するものであるのである。そうしてウイレーが實質的にはグムプロウイクツやヅェルケムと氣脈を通じつゝ、形式的にはギッディングスの如くに説明は記述の一種であると見る見解は、其の儘では正常でないが、併し右に述べしが如き私の見解から見ると、ウイレー自身の意識して居ない深い意義を有するものと思はれる。

上に述べし處によりて明かなる如く、記述は其の最とも根本的な意義に於ては、説明の原理を確立するものとして、説明と同一化されるものでなく區別さる可きものであるが、しかもアーベルの解するが如き意味にて、區別さる可きものでないのである。そうして説明は社會科學方法論の最とも根本的な問題であるので、其の原理を確立するものとしての記述の實質的意味も、つまりは説明を如何なる意味に解するやによつて定まるのである。併し此處に説明問題を詳しく論ずる暇はないから、只其の一般的意義を極簡単に述べるに止めざるを得ないが、要するに私は一般に説明は、アーベルの云ふが如く、「何故に現象があるが如くにあるかを示す」ものとして、論理的には嚴密に區別さる可き二つの論理的關係或は連結を意味するものと思ふ。

其の一は事實と事實との因果關係或は因果連結にして、其の二は事實と事實と志向關係或は志向連結である。併し自然科学に於ては説明は一般に前者即ち因果連結の究明を意味するものと解されて居る。否な方法的には因果連結を究明せんとする科學が即ち自然科学であると云ふ可きである。そうして嚴密なる意味にては、科學とは即ち自然科学を意味するものであると見る見解は、近頃まで一般に行はれ、殊に米國に於ては今日も尙ほ同じ見解が一般に行はれて居ると思はれるので、アーベルの説明の概念もつまり因果連結の究明を意味するものと思はれる。然るに私は社會現象或は文化現象の根本的特質は、夫れが本來志向的なものであつて、そうして志向連結に於て存立して居ると云ふことに存すると考へるので、隨ふて因果連結に於て存立するものと見て、夫れの因果連結を究明せんとする立場からは、夫れの真相を深く把握することは到底不可能であると考へて居る。かくて私は因果連結を究明せんとする科學と、志向連結を究明せんとする科學との科學の根本的部二類を區別し、前者を理解科學後者を了解科學と稱したいと思ふ。そうして一切の社會科學は了解科學の部類に屬するものとして、或は了解科學の代表的なるものとして、始めて眞の科學として建設し得られるものと確信して居るのである。併し最早此の見地から更に深く米國文化社會學論争を批判する暇はないから、遺憾ながら此處で擱筆する。